



Episode3

はしもと きよりの
橋本 清徳さん

白岩でリンゴを栽培している橋本果樹園の2代目。高校卒業後、1年間長野の果樹園に住み込みでリンゴ栽培について勉強し、一般企業を経て、家業を継ぐ。就農して17年目。

この味をずっと守り続けていく

待ち望んでいる
人たちのためにも

白岩・宮田にある橋本果樹園。もともとは養蚕をなりわいとしていたが、父の代で桑畑をリンゴ畑に変え、リンゴ専門の果樹農家としてやってきた。そんな橋本果樹園の2代目が橋本清徳さんだ。

150アールの畑には、約1,200本のリンゴの木が栽培されている。主力の「フジ」のほか、「ジョナゴールド」や「つがる」など10種類が栽培され、9月上旬から12月まで収穫される。

収穫が終わるとすぐ、次の年に向け「剪定」がはじまり、年十数回の「消毒」、「花摘み」をし、成長させる果実の数を調整する「摘果」を行う。1本の木に約100個ほどになるよう調整するそうだ。

「1年があつという間に過ぎていきます」と話す橋本さん。そんな中で常に気を配っているのは、『おいしいと言ってもらえるリンゴを作ること』。

「毎年同じ管理でも同じリンゴにはならないんです。寒暖の差がないと蜜が入らないし、台風が直撃してしまえば、せっかく育ててきたリンゴも大量に落とされてしまう。お客さんの反応を参考にしながら、管理を変えるなど試行錯誤をしている。

そうして育ってきたリンゴが「思ったように色づき、蜜が入り、形がよくなっている」と本当にうれしい」と笑顔になる。

そんな橋本さんの目標は、『今のおいしい味をずっと守っていくこと』。「おいしいリンゴを作るのは当然として、地元でも全国でも、このリンゴを待ち望んでいる人たちが、毎年買ってくれる人たちがいるので、この味をこの場所で作りが続けることが大切です」と話してくれた。

また、「あだたらりんごというブランドをもっと広げたい」。そうしたいので、橋本さんは今日もリンゴを作り続けている。



左. リンゴを栽培する橋本果樹園の皆さん。収穫期には地元の皆さんにお手伝いをお願いしています

右. かごは収穫したリンゴでいっぱい！最盛期にはかごは1,000箱にもなります



Episode4

たかばやし かずえ
高林 和江さん

FM モットコムパーソナリティとして、平成 18 年 12 月の開局当初から現在まで地元へ声を届けている。現在は『おもしろヒルミネーション(毎週金曜)』と『ふくしま絆づくり FM 放送』を担当



地元へ寄り添う話し手でいたい

その人の思いを
一人でも多くの人に

いつも地元へ元気を発信しているコミュニティエフエム『FMモットコム』が産声を上げたのは、平成18年12月20日。高林さんは、開局に先立って募集していたラジオパーソナリティに応募した。

幼い頃からなにか表現することが好きで、中校生のときは放送部に所属。社会人になってからは会社勤めをしながら、スキー場のDJやイベント司会をしていたため、ラジオのパーソナリティにとっても興味があった。「不安や緊張もありましたが、地元へラジオ局ができて、そこで伝えることができるという事に毎日ワクワクでした」。

開局当時は、メンバーのほとんどが経験がなく、番組の準備は連日深夜までかかった。「元旦に流すCMやナレーションの収録を、12月30日の雪の降り積もる中、夜遅くまで何度も取りなおしていたことが

とても記憶に残っています」。

震災後は、県内6局で放送している「ふくしま絆づくり FM放送」の本宮市を担当。震災にあった皆さんや復興に向けて頑張っている皆さんにインタビューを続けてきた。「その方が何を伝えたいのか。訴えたいのか。聞き出し方、言葉の選び方などとてもとても考えました」。「寄り添うことによって、少しずつ話してください。ときには一緒に涙して、＼ありがとね」と反対に元気や勇気をたくさんいただいています」。絆づくり放送では、その人に寄り添う大切さに気づかされた。

その人が一番伝えたいことを引き出して、一人でも多くの人に伝えていきたいと話す高林さん。「これからも必要としてくださる人、場所がある限り、リスナーの皆さんに地元ならではの情報を伝える、＼地元へ寄り添った話し手でありたいと思います」と普段ラジオでは見えない素敵な笑顔で話してくれた。



▶10年前の最初の放送で使用したQシートと現在のQシート



10年前の開局当時。今夜もんだNightを担当していました